

米空軍、陸自降下訓練で相互運用性強化 USAF, JGSDF conduct jump training, strengthen Yokota interoperability

July 22, 2019

By Yasuo Osakabe
374th Airlift Wing Public Affairs

昨年の日米共同統合演習「キーン・ソード19」以来、横田基地第374運用群の空兵と陸上自衛隊第1空挺団の隊員は、戦闘即応性と相互運用性を高めるための空挺訓練作戦を実践し、二国間の関係強化に取り組んできた。

米軍と自衛隊は今年6月、アラスカ州エルメンドルフ・リチャードソン統合基地での空挺作戦演習「アークティック・オーロラ」の訓練を終えたばかりだ。米軍と自衛隊の隊員は7月16日、再び横田基地に集い、第374運用支援中隊の米空軍「生存・回避・抵抗・脱出(SERE)」専門官がジャンプマスターを務める空挺訓練を大分県・陸上自衛隊日出生台(ひじゅうだい)演習場で実施した。

「運用上の連携を高めるための米軍の航空機乗務員と日本のパートナーとの二国間訓練は重要だ。こうした訓練の機会を通じて、普段自分達が行っている実践方法とは異なる方法を学べる」と第36空輸中隊C-130Jパイロットのイバン・テイラー大尉は述べた。

訓練は、まず横田基地で陸自空挺隊員80人以上が米軍輸送機C-130Jスーパーハーキュリーズ2機に搭乗し、福岡県の航空自衛隊築城基地に移動した。陸自の隊員はそこで装備し、C-130Jからの空挺降下訓練を行った。

「この訓練任務で課題だったのは、米空軍が通常使用していないVIRSと呼ばれる空挺降下方式を使う陸自との調整だった。普段、米軍のC-130Jは、空挺隊員を投下するには、航空機の機械が自動で風を分析し、空挺降下開始のタイミングを知らせるCARP方式を使う」とテイラー大尉は述べた。

VIRSは、地上の管制官が降下地点の風を分析し、ラジオを通じてあらかじめ決めた着地点の上空に航空機を誘導し、「降下、降下、降下」と空挺降下開始の指令を出す。

「陸上自衛隊と共に訓練することによって、米軍の航空機乗務員は普段練習する機会のない特殊な空挺降下方法を用いる機会を得た」とテイラー大尉は述べた。

今回の訓練で、米空軍第374運用支援中隊のSERE専門官はジャンプマスターを務めた。「陸自の空挺隊員と働く上で、特に壁というものはなかった。陸自の隊員は機内でも積極的にコミュニケーションを図り、合図の方法も統一していた。今回の訓練は互いにとって実りの多い訓練となった。2機のC-130Jから約80人の空挺隊員を目的地に降下させるのは簡単なことではない」と第374運用支援中隊SERE専門官・空挺隊員のセス・サレット技能軍曹は訓練を振り返った。

総じて訓練は成功した。第36空輸中隊の乗務員たちは、2つの異なる空挺降下方法を用いて陸自の全空挺員を降下することができた。「この訓練は、同盟国の能力を更に理解し、米軍と自衛隊との関係を強化する」とテイラー大尉は述べた。

